



大学のころはラグビー愛好会に所属。

弱小で人数も足りなかったが「一生の友」と呼べるほどメンバーは仲よし。

大学卒業後もまめに連絡をとりあい、社会人三年目にして、すこしは落ちついてきたので久しぶりに集合。

メンバーの一人がコネを使って、料亭の離れの座敷を貸しきり。

周りに気がねすることなく、大学時代にもどったように俺らははしやぎ、じゃれあつて笑いこけ、畳にのた打ち回って。

すっかり酔っぱらい、羽目を外して「目隠し鬼しようぜ！」と一人が提案。

かつて練習にとりいていた「目隠し鬼」は懐かしいもの。そりゃあ「やろうやろう！」と皆は乗り気で、じゃんけん。

負けた俺が鬼となり、会社帰りでスーツのままだったに自分のネクタイで目隠しを。

視界が閉ざされてから身がまえると、メンバーは音を立てないようにしたり、わざと騒がしくして攪乱したり。

耳のいい俺は大学のころも鬼役が得意だったとあり、あつという間に一人に抱きついた。

が、相手は声をあげず、なぜか抱きかえして、股間に固いのをずりず

り。

驚いて突き放そうとするも、いまだ筋肉質な体型を維持するラグーマンなだけにホールドを解けず。

上体をのけ反れば、背後からも抱きしめられ、胸を揉み揉み。

なかなか「なーんてな！」と笑わないし、まわりも冷かしたり止めようとしなない。

抱きつく二人はもちろん、まわりも欲情しているのか、獣じみた息づかい。

困惑するうちにも前後から愛撫を畳みかけられ「やあ、ばかあ、やめろお、ああ・・・！」と体の力がぬけて、喘ぎがだだ漏れ。

周りの熱視線を覚えれば、なおのこと体が火照って疼いてしまい。

濡れたズボンを摩擦され、布越しに乳首をつねられ「見るな、くう、ふああ！」と射精。

目隠しをしたまま、野郎どもに見られながらイくなんて屈辱的。

「お前ら、許さな・・・！」と声を荒げながらも、されるがまま四つん這いに。

ズボンと下着をおろされて剥きだしになった尻に指が。
だけでなく、四方から手が伸びて、全身を撫でまわして。

「だめえ、そんな、一気にい！ひいあ、ああ、ああ、あうう！やらあ、いくつ、指いい！いっぱいあ、動いちや、やらああ！」

屈辱を噛みしめる暇もなく、また思いっきり射精。

床に崩れそうになるも、複数の手が支えて、前から後ろからメンバーの誰かのそれを咥えさせられしやぶらされて。

「ば、ばかあ、お前ら、溜まってんのお！はあう、うあ、ラガーマン、いっぱ、相手、むりいい！おふ、くおお、ラガー、マンの、ちんこお、しゅごしゅぎてえ、らめええ！」

前と後ろ同時に注がれて「んんんむう！」とメスイキしたと同時に目を覚ました。

日が差しこむ座敷には、スーツ姿のラガーマンたちが雑魚寝。

服が乱れているとはいえ、事後のように見えないし、俺の体も無事。

いや、ズボンの股がびしょ濡れ。

それを見てかっ顔を熱くしたなら、そそくさと座敷から去ったもので。

そのあと仲間の心配する連絡が届いたが、すべて無視。

親友と呼べるラガーマンたちにあらぬ欲望を抱く俺は「また集まろう」との誘いに乗るか否か、ひどく頭を悩ませている。